

慶谷壽信先生の学問などについて(4)

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することになりました。

* * * * *

中村：今回も慶谷先生とインド学というテーマで話を進めたいと思います。インド学に関係のある著作をもう一度上げると次のようになります。

【総合】

1978. 10 仏教文化と中国語学
1987. 9 『音韻のはなし —中国音韻学の基本知識—』の訳者注

【反切の起源】

1974. 10 中国音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——
1988. 6 反切と仏教文化【「慶谷壽信先生の学問などについて(3)」で公表】

【頭子音の認識】

1980. 3 『玉篇』巻末に附された「五音聲論」について
1981. 10 「字母」という名稱をめぐって
2000. 3 国際音声字母の中国流の受容

【音訳漢字】

1980. 7 歌戈魚虞模の音価をめぐって
1997. 3 歌戈魚虞模古讀論争の概略
1997. 6 歌戈魚虞模古讀論争の学史上の意義

吉池：前回は【反切の起源】に係わる論文を中心に話し合いました。「中国音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——」では、二合音は反切の直前の段階ではないとしていますので、これにより、二合音と反切との間に他の影響を受けた段階を想定することができます。こうして、反切と仏教文化との関係を論ずる条件を整えたのではないかと、この話になりました。しかしながら、「反切と仏教文化」では、反切の創始に対する仏教文化影響の有無を論ずるのではなくて、もっぱら仏教文化影響説が生み出された背景を述べています。

中村：仏教文化の影響があったかどうかというようなことについては、事実の認定は困難ですが、仏教文化影響説という学説は確実に存在します。そこで慶谷先生は、その学説が生まれた背景を追求することに専念した。以上が前回のまとめです。それで今回は、【頭子音の認識】に関する論文ですね。

吉池：【頭子音の認識】に係わる 1981 年の「「字母」という名称をめぐって」については、2 回目の対談のときに、中村さんが言及しました。

中村：はい。1982 年に中文に学士入学してすぐにこの論文の抜刷を先生から頂きました。漢訳仏典で「alphabet」の意味で用いられていた「字母」という語が、いかにして漢語音韻学における「三十六字母」のような頭子音を表す用法を得たかを問題にしたものです。

吉池：「「字母」という名称をめぐって」の前年に『玉篇』巻末に附された「五音聲論」について」がでています。この論文の準備のなかで、「「字母」という名称をめぐって」がでてきたのではないかと想像しているのですが、それはともかくとして、この論文、なかなか興味深いものです。

中村：わたしも改めて読んでみました。タイトルにある「五音聲論」は声母を調音の部位でまとめた表です。

五音聲論
東方喉聲
何我剛鄂譌可康各
西方舌聲
丁的定泥寧亭聽歷
南方齒聲
詩失之食止示勝識
北方唇聲
邦尅剥霰北墨朋邈
中央牙聲
更硬牙格行幸亨客

この分類は、『韻鏡』などの韻図の五音の枠にはほぼ相当していますが、問題となるのは「喉聲」と「牙聲」の区別です。韻図では通常、三十六字母の「影曉匣喻」を喉音、「見溪群疑」を牙音として扱います。つまり x- γ- などの摩擦音は喉音に、k- k'- ŋ- などの破裂音は

牙音に配されます。しかし、上の表では「喉聲」の中に破裂音も含まれており、「牙聲」に摩擦音が混入しています。清朝の学者はこの部分を粗略であると見なしたり、上古に牙音と喉音の区別がなかった反映だと考えたりしたようですね。

吉池：慶谷先生は、「五音聲論」を粗略なものの一蹴するのは早計であるとし、それなりの基準があったとしています。そしてこの表の特徴をはっきりさせるために、それぞれの部位に挙げられた例字について、等韻学的な情報と Karlgren の中古音再構音価を示しています。

「東方喉聲」

何	歌韻匣母一等	$\gamma \hat{a}^1$
我	哿 疑 一	$\eta \hat{a}^2$
剛	唐 見 一	$k \hat{a} \eta^1$
鄂	鐸 疑 一	$\eta \hat{a} k^4$
謳	歌 見 一	$k \hat{a}^1$
可	哿 溪 一	$k' \hat{a}^2$
康	唐 溪 一	$k' \hat{a} \eta^1$
各	鐸 見 一	$k \hat{a} k^4$

「西方舌聲」

丁	青韻端母四等	$t i \hat{e} \eta^1$
的	錫 端 四	$t i \hat{e} k^4$
定	徑 定 四	$d' i \hat{e} \eta^3$
泥	齊・霽 泥 四	$n i \hat{e} i^{1,3}$
寧	青 泥 四	$n i \hat{e} \eta^1$
亭	青 定 四	$d' i \hat{e} \eta^1$
聽	青・徑 透 四	$t' i \hat{e} \eta^{1,3}$
歷	錫 來 四	$l i \hat{e} k^4$

「南方齒聲」

詩	之韻審母三等	$\acute{s} j i^1$
失	質 審 三	$\acute{s} j \ddot{i} \hat{e} t^4$
之	之 照 三	$t \acute{s} j i^1$
食	職 牀 三	$d \acute{z} \ddot{i} \hat{e} k^4$
止	止 照 三	$t \acute{s} j i^2$
示	至 牀 三	$d \acute{z}' j i^3$
勝	蒸・證 審 三	$\acute{s} j \hat{e} \eta^{1,3}$

識 職 審 三 s̺ək⁴

「北方唇聲」

邦	江韻幫母二等	pâŋ ¹
尨	得明二	mâŋ ¹
剥	覺幫二	pâk ⁴
雹	覺並二	b'âk ⁴
北	徳幫一	pək ⁴
墨	徳明一	mək ⁴
朋	登並一	b'əŋ ¹
邈	覺明二	mâk ⁴

「中央牙聲」

更	庚・映韻見母二等	keŋ ^{1,3}
硬	諍疑二	ŋeŋ ³
牙	麻疑二	ŋa ¹
格	陌見二	kek ⁴
行	庚・映匣二	ɣeŋ ^{1,3}
幸	耿匣二	ɣeŋ ²
亨	庚曉二	xəŋ ¹
客	陌溪二	k'ək ⁴

一見して明らかなように、「唇聲」を除けば結合する韻母の等位が一定しています。そして、「特に喉聲と牙聲に限っていえば、両者の区別は、語頭子音の調音部位による分類ではなくて、韻母ないしは音節全体の調音部位という考え方が許されるなら、牙聲：前 対 喉聲：後 という調音部位の対立と解釈できよう。」とまとめています。

中村：「音節全体の調音部位」というのは不思議な表現ですね。

吉池：慶谷先生は中国人の音声認識の方法が分析的というより総合的であると考えたようです。声母だけを分析的にとらえるよりも、音節全体でとらえるのが中国流だということでしょうか。そのため二等韻字を配した「牙聲」を前寄り、一等韻を配した「喉聲」を後寄りにとらえて上のような分類になったのではないかという訳です。

中村：しかし、どうも釈然としませんね。「五音聲論」が声母の分類であることは一目瞭然ですから、例えば、軟口蓋音の中でも結合する韻母によって調音部位に差があり、その差

を明確に認識して、「牙聲」と「喉聲」に分類したと考える方がよほど単純で明快という気がするのですが。つまり、前よりの k-と後ろよりの k-の区別ですね。「五音聲論」では前よりの k-のグループを「牙聲」とし、後ろよりの k-のグループを「喉聲」とした。インド音声学の影響でその区別がなくなり、それに代わって破裂音を「牙音」とし、摩擦音を「喉音」とする新たな分類が中国語の音韻学に取り入れられたというのはどうでしょう。

吉池：なるほど、それも一つの考え方ですね。いずれにしても「五音聲論」がインド音声学の影響を受けた『韻鏡』などの韻図の分類とは異なる部分も持っていること、その非『韻鏡』的（つまり非インド的）な部分には中国人の音声認識が反映していること、この二点は間違いないと言えそうです。

中村：慶谷先生がこの論文で示そうとしたことの一つは、中国人がインド音声学を受容するに際して、自らの音声認識との違いを克服するのに相当の試行錯誤を要したということでしょう。先生が言うように、「語頭子音のみを分析して観察することが容易でなかったことに即応して、一方で、音節全体を総合的に把握するという態度が中国人にみられた。」（123頁）というのは——「五音聲論」がそれを証するかどうかはさて置き——確かなことのように思われます。そのような中国人がインド音声学に出会った時、それにすぐに馴染めなかったとしても不思議ではありません。

吉池：そうですね。古代インドの音声学は現代の音声学にも多くの影響を与えたものですが、一方、中国では漢字という音節単位の表意文字を一貫して使用してきた訳ですから、その出会いはいろいろな意味で衝撃だったかも知れません。ところで、中国人の音声認識といえば、2000年の論文「国際音声字母の中国流の受容」（『人文学報』311）にも、慶谷先生流の切り口が見られます。

中村：この論文は、中国で用いられる国際音声字母（IPA）の分類に、本家の国際音声学協会の処理の仕方と異なる中国流の部分があることを問題にしたものですね。検討の主な対象となるのは、舌尖音や舌面音など、上あごと舌を使って発音される子音です。

吉池：[ts] [tɕ] [k]などはIPAの表の区分では通常、歯茎音や口蓋音などのように上あごの音として扱われますが、中国では伝統的に舌尖音・舌面音・舌根音などのように舌の音として区分されます。どうしてこのような区分の違いが生じたのが慶谷先生の永年の関心事であったようです。

中村：そこにも説明がありますが、古代インドの音声学では調音に関してすでに、sthāna（場所）と karaṇa（器官）とを区別していたようです。Pikeの音声学で、point of

articulation (調音点) と articulator (調音器官、調音体) というのに相当するとのことですが、[t] を例に取れば、sthāna (場所=調音点) が歯茎、karaṇa (器官) が舌尖ということになります。

吉池：IPA の表では通常、Alveolar (歯茎音)、Palatal (硬口蓋音)、Velar (軟口蓋音) などのように上あご部分の調音点による区分を用いますが、中国では舌尖音、舌面音のような調音器官としての舌の位置による区分を用いていますね。

中村：しかも、それぞれを前・中・後に三分して次のようにするのが一般的です。

舌尖前音 (ts など)、舌尖中音 (t など)、舌尖後音 (tʂ など)

舌面前音 (tɕ など)、舌面中音 (c など)、舌面後音 (=舌根音 k など)

このような舌尖音三分、舌面音三分がいつ中国にあらわれたかというのがこの論文の主要なテーマです。結論としては、趙元任の『現代吳語的研究』(1928年)がこの区分の出発点で、それには Otto Jespersen の著作が影響している可能性があるとのことでした。

吉池：ここではどのような区分法が正しいかではなく、中国式の区分法の沿革を追究した訳ですね。

中村：はい。調査に長い期間をかけた、いかにも慶谷先生らしい論文と言えます。